

# 巻頭言

会長 浅田里美

新しい年度に向かって、忙しくされている方も多いのではないのでしょうか？私は、この時期になると、療育に通った子ども達がそれぞれのステージに向かう姿を見て、うまく支援できたかなと不安になったり、成長を喜んだりしています。子どもの療育は、本人だけではなく保護者の育児支援も大きな目標に置いています。当然様々な育児感を持った親とともに子育てを考えますが、時には「このやり方が良いのに・・・」「こんな関わり方はすべきではない」と食い違いを感じる保護者に会うこともあります。

先日、絵画修復家の岩井希久子さんの話を聞く機会がありました。ゴッホやピカソ、日本では山下清の絵を修復している方で、NHK「プロフェッショナル仕事の流儀」などでご存じの方も多いかもかもしれません。絵画は、50年に一度位は修復が必要なようで、私たちが見ている絵もそのままのものはないのかもかもしれません。絵の修復には「良い修復」と「悪い修復」があって、絵の技術そのものよりも、絵の読み取りが重要なようでした。描いた画家が何を伝えたかったか、そして、どんな技法を好み、どんな表現をしていたかをつかみ、修復を行うことが重要と力説されていました。あの、フェルメールの絵も今回の修復で真珠の数が増えていることがわかり、元にもどした修復が行われたということです。技術の高い人の中にはつい描き加えたくなる人もいます。彼女の仕事の流儀は、いかにその人らしさの色を出すか、技法を再現するか、気の遠くなるような作業だと思いました。

私たちの療育にも同じことが言えると思います。人の生活スタイルや価値観はそれぞれ違います。子どもとその家族が、自分らしく人生を送っていくお手伝いと考えるとまた違った対応が出てくるかもしれません。基本スタイルをそのまま提案するのではなく、相手に応じてアレンジする力が必要なのでしょう。

そして、私たちも高い技術と知識に支えられた自分らしい言語聴覚士を目指したいですね。